

# 文化高知 34

## 地場特産品から高知の文化を想う

辻 隆造

昨春秋、アメリカ流通事情視察のため渡米、ニューヨークにある当社駐在員事務所を訪ねました。色々お世話になると思い、「土佐のくだもの村から」のジャムを手土産に持参しました。帰国後、次のような手紙を頂きました。

「くだもの村から」のジャムを頂き改めて日米のカルチャーの違いを感じました。一般的にアメリカ人はコストダウン志向で合理性を追求しますが、日本人は付加価値を大変大切に、たえずアイデアを付加、ディーティルにも金を惜しまない国民性で、その結果いいものが出来るかわりに価格は高くなってしまうのですが、逆にアメリカは優秀な一部の人が創造的なものを生み出した後は、順次コストをカットすることを考え、一般に普及させていくうちに確かに価格は安くなっていきますが、品質もそれなりに手抜きが見られるようになるという感じです。

こちらでは近くのスーパーに行けばジャムやママレードなどは安いものが沢山ありますが、味は今一つという生活が普通だっただけに、今回頂いたイ

チジクやスモモのジャムに家族全員感謝感激いたしました。土佐は私にとつて未知の国でしたが、何か土佐の太陽と風の香りを感じ、南の国の自然をこのジャムから味わうことができました。



「風景」貞廣 英明

高知におりながら日頃感じなかった土佐の文化をアメリカにいる友人に教えられた次第です。

又、昨年来大阪にいる友人に「一本釣りワラ焼きたたき」を送りました。ま さっそく礼状と共に「うまかった。ま

ったく同じものを私の知人達に高知から直送してくれ」と注文が届きました。業者の方に聞きますと、ワラでいぶしたのが一番うまい。しかし最近では稲刈りもミジン切りになりワラの入手すら困難になり、手間を省くためガスやダンボール紙で焼くのが普通になった。しかし私は農協と契約し、ワラを倉庫いっぱい積み込んでいます。漁師が一本釣りで釣った新鮮な鰹を昔ながらの手法、ワラで一気に焼きあげているのです、とのことでした。

やはりこの頑固なまでの「こだわりの」テーマ惜しまぬ「手造り」が大阪の友人に受けたのでしょうか。世の技術革新が進み、合理化されればされるほど、こういった「こだわり、手造り、自然、本物」と言ったものが貴重になると感じた次第です。これが文化ではないでしょうか。

土佐にはいいものが沢山あります。こういった文化を県外の人にもっともっと紹介するのが地元百貨店の使命であると心している昨今であります。

(株)高知大丸専務取締役

# 後の先

片岡徳雄

二年ほど前の「里がえりフォーラム」に参加した時のことである。東京の高知県人会の幹事をなさっている方が、「郷里への提言」というシンポジウムで、言われた。

「私は、弁護士という職業柄、そして在京ということ、いろいろ土佐の方に頼まれ、お世話をしたりしますが、他県の人に比べ、土佐人には目立つことがあります。

も返事を書く。  
（フーン、なるほど。偉いもんだ。少しは私もみならわなくっちゃあ）  
そこで、教訓（？）  
「切手とハガキは手先にいつも」というのをづくり、いささか実行したものです。ついつい筆不精になつたり、気持ちはあっても返札を欠くことになるのを、手元の切手とハガキで阻止しよう、という作戦である。

この点、少し気をつけると、土佐

の郷土の連中には「返答なし」が実に多いことに、気がついた。「ありがとう」の気持ちはあっても、それをハガキに示す形式をとらないのである。

などはズルイと蛇蝎視しているのではないだろうか。この潜在的潔癖さがそもそも問題なのだ。  
たしかに、土佐人は好人物が多い。根は善人である。しかし、時に、いや大いに、無礼者、強引、エゴイズム、協調性に欠く、とみられる。  
それは、感謝の気持ちを、書状でスパヤク示し、粗品で形に示す、率直さを欠くためである。相手の言い分を聞くよりも自らの主張を語る、短兵急のためである。

私は、土佐に帰って、旧交を温める酒席を好み、カツオやタタキの美味を愛する者である。しかし、あの喧騒をきわめる酒席の談話風土は、なんとかならぬか。

十人の会合だとして。十人それぞれが、「後の先」でしゃべり、吠えている。一人が語り、あと九人、酒をなめなめ反応する、そういう会話の交換に乏しい。「後の先」で展開する会話文化は、土佐には育たないものか。

イゴッソウは、信念の固さとしてはよいが、相手との交流や対話を欠く嫌いがある。

私たちの坂本龍馬には、信念と獨創性と、そしてなによりも「後の先」があつたように思う。

（広島大学教育学部長）  
教育 学 博 士

## 演劇鑑賞運動の今日とあした

— 地方小都市での躍進 —

坂本 計司

まざまな困難と変遷の道をたどって来ました。

一九五七年、わずか三百名足らずで発足した高知市民劇場は、今年一月、会員数が七千名を越えて、名実ともに全国一の演劇鑑賞会にまで成長しました。人口三十二万の小都市でなぜこのように発展するのか、この数年、全国の注目を浴びています。

かつて労働者を中心に数万名の会員を組織していた大阪労演や東京労演は数千名の組織に減少してしまいました。これは社会状況や労働組合運動の変化と無縁ではありません。あらゆる演劇公演が集中する大都市で、一つの鑑賞会では対応できないとの反省から都内二つの区と周辺都市に次々と鑑賞会がつくられ、首都圏ブロックはいま、十八団体、三万二千名の組織となりました。

地方の中都市も企業の冠興行や商業興行の進出、コープシアターの台頭などによって、新たな対応を迫られています。永年全国一の会員数を誇っていた仙台演劇鑑賞会がこの数年後退を続け、昨年六月、ついに六千名を割ってしまったことは特徴的です。

私たちの演劇鑑賞運動は、国の文

化予算が欧米の十分の一にもみたないという、日本の極めて貧困な文化状況の中から生まれました。しかし、これは世界に類をみないユニークな市民運動なのです。いわゆる商業興行とは根本的に異なり、利潤を生み出す必要がありませんから、会員の納める会費は必要最低限の金額ですし、作品を選ぶのも、運営するのもすべて会員の手で行われます。自分

たちの演劇を観たいという要求を自分たちで実現する、いわば文化生活協同組合です。

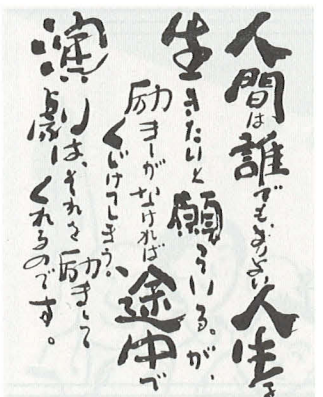
この理念は全国どの鑑賞会も変わりませんが、その地域にみあつた活動の工夫は必要だろうと思えます。そして何よりも重要なのは、状況に負けない活動をどう展開していくかだろうと思えます。高知市民劇場はあの悪名高い「消費税」を逆手にとって、七千名の壁を越えました。ところが、いま私たちの前に大きな問題が立ちふさがっています。

それは文化ホールの問題です。高知市に唯一つしかないホールは、超過密利用によってパンク寸前なのです。この十年間に全国で、六五二の公共ホールが建設されたといわれていますが、県内で使用にたえるホールは夜須町公民館と幡多文化センターの二つしかありません。私たちは三年前に幡多市民劇場を誕生させたように、県内の数カ所に鑑賞会をつくり、地域に根ざした活動を展開しているのですが、高知県の貧しい文化状況がそれを阻んでいるといっても過言ではないでしょう。新しい文化ホールの建設は文化団体だけの要求ではなく、県民の要求であること、行政は真摯に受け止めて欲しいと思います。

（高知市民劇場代表幹事）



公演当日、受付をする運営サークル



# 漫画の土壌

矢野 功



先日、某出版社の編集局長が私の家に来た折、「高知は人口の割に全国で一番本の売れない土地だね。どうしてだろう?」と聞かれ、内心ドキッとしたけど、「他にもっと面白い事があるからでしょう……」といいかげんな答え方をしたものだ。又、土佐出身の大先輩は「土佐人は酒を飲む金があっても、絵を買う金がない」とボヤいていた。しかし、創造力豊かな漫画家を沢山輩出している土佐はまんがのメッカである。

私が五歳の時、高知市内を襲ったB29は容赦なく焼夷弾の雨を降らせた。当時、私の家は、今の市役所の建つる所にあつた。私はそこで生まれた。前には病院や神社があつた。バリバリと音を立てて、焔に包まれて燃えつきた。家ではナスを少し植えていた。そのナスが焼きナスになって食べたら美味かつた。お城の鯉も白い腹を出して水面を埋めつくした。私の一家は焼け出され、家も財産も失つて洞ヶ島に移つた。そこには似た様な子等がいて、たちまち悪ガキ集団ができた。近くに薫神社や小津神社があつて、木のほり追いかけて、チャンバラなどして遊んだ。高知の四季は豊かで、水遊び、魚とり、また目白とりもした。この貧乏少年時代こそ、私を色々な面で鍛えてくれたと思う。



先輩(故人)は、「漫画家は、貧乏人育ちが感性が豊かでいい」と何時も言っていた。しかし、終戦後のことなので、現代社会には当てはまらない。

小学校に入る前から落書き魔で壁やふすま、障子、ノート、教科書の空いている所をまんがで埋めつくした。いうまでもなく皆に叱られた。しか

し、やめられなかった。色々な欲求不満、葛藤、悲しいにつけ、楽しいにつけ、まんがを描く事によって一人で解消していたようだ。

家の二階から兄貴(二つ上、漫画家の矢野徳)と二人で、テスリに足を出して下を通る人の顔を見ては「おっ、あれは狸の目じゃないか、狐の目だ」なんて足をバタつかせながら笑うものだから、親父や長男(九つ上)に人を笑うものじゃないと叱られた。

徳とはいつも連れこつていた。イモ、菓子など賭けてはよく将棋をした。徳は形勢不利とみるや賭けていたイモや菓子にツバをつけるので……いつもゴマかさ

その頃、酔たん坊がおしっこをもらしてふらふら歩いていたり、道端で寝込んでいたり、兵隊気狂いもいた。「突撃!」自慢のラッパを吹いて数分走ると「伏せろ!」自分で叫んで自分で実演をした。それについて私や悪ガキは移動したのである。他にもアブチ、ノブちゃん、マツさん、ミス四銀もいた。

日曜市のハブの実演販売は今でも

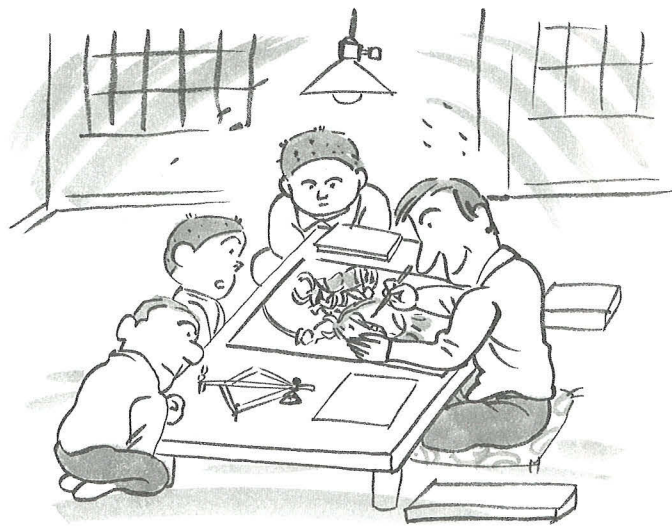
鮮明に覚えている。それはその息子とよく見にいったから。

実演はワンパターンで能書きを一通りしゃべったあと、口にどす黒い血のようなものをふくんした後、ハブの油を一滴その口に入れ、数十秒すると口から一滴見本に垂らす。この時、垂らした血が問題で、どす黒い血から真紅の血に変わっていたら「よし」変わっていないければ「まだ早い」である。

何度も見にいっているうちに、手のうちを覚えちゃつて

「次に一滴血をたらすゾ」「ホラホラまだ血が紅くなっていないからもう少し待つのだ」「次はどうじゃ!と絶叫するから見てみるや」悪ガキ連が先々というので敵もやりにくい。「子供は帰れ」それも実演の調子のついたしゃべり方で持っていた棒でボカボカとやられたものだ。たちまち四五人のガキはコブを頂戴した。しかし、自分の息子だけは、ちゃんと叩いてない。「ズルイ」やっぱりお父ちゃんだ。

私の家の裏にベン画の上手なおんちゃんが移り



住んできた。伊藤彦造等の絵を拡大器を使って模写するのである。本物より迫力があつて何時も見に行つては家に帰って、山川惣治等の絵を模写した。このおんちゃんには物凄く感化された。

私が漫画家になる下地は、こうして養われた。

高知で十八年間、後は上京して三十一年間、色々と修正しながら「いごっそう」を忠実に守っている様な気がする。

(漫画家)

# 土佐に育まれて

やきものづくりのひとりごと

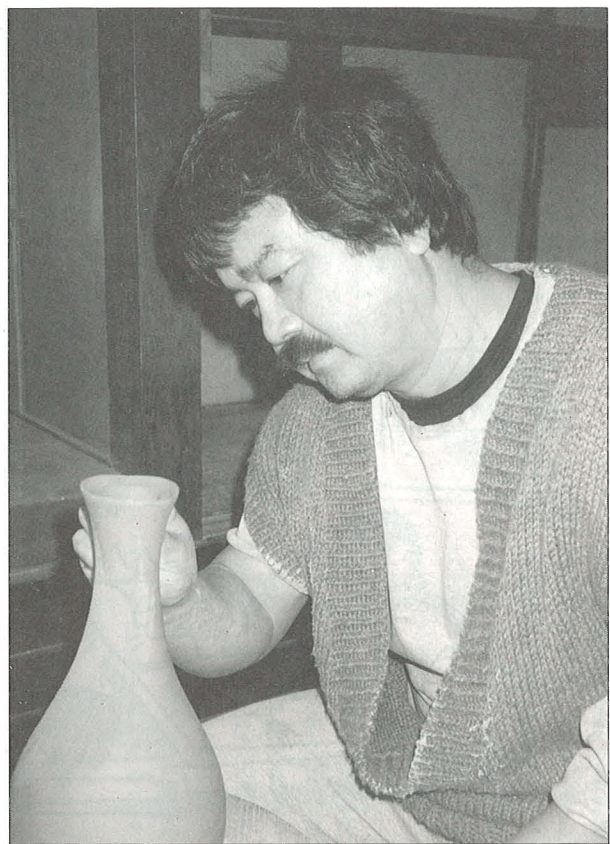
井内芳樹

南向きの障子をあげれば、ビニールハウスと竹藪と安芸の町を突き抜けて太平洋が飛び込んでくる。一月の風にしては冷たくもない、やはり土佐か。

私の仕事場は、窯場の何代か前にあたる窯元の隠居所であった建物で、床とふすまを取り払い土間に使っている。いつもは見えなかった押入の壁は漆喰なのだが、よく見ればしつかりと、そして実に丁寧に塗りこめられているのが判り、何となく落ち着いた気持ちになっている。私は広島県の西のはずれ大竹という町で生まれ、十八歳までを過ごした。目の前は瀬戸内海で、背には中国山脈の裾野が迫り、雑魚とやまももは馴染みのものであった。そんな風土で育ったせいであろうか、土佐に来て二十数年、異郷に住む思いもなく、かえって気に入っているの

ある。

やきものとの出会いは、京都市立美術大学に入ってからでかれこれ二十六年になる。大学での四年間はやきものアウトラインをひとあたりまわるくらいで、最大の収穫はものを見ることを学んだことであり、ほとんどは学生の特権のごとく甘えと思いがりの破廉恥な日々であった。卒業したてのタマゴの私が、やきものに本格的に取り組むようになったのは内原野に来てからで、当時の窯場は登り窯を使った手づくりの植木鉢や蘭鉢などを焼いていたが、折しも日本は機械化・大量生産へとまっしぐらで、やきものもその例外ではなく型ものの安い鉢が大量に回るようになっていた。安芸在住で、郷土のやきものを愛う故長崎太郎氏（元京都市立美術大学長）の再興への熱意によって一人、二人と集まり、



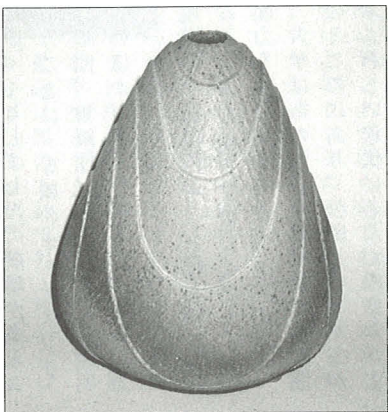
それを受け入れる英断を下したのが窯のオーナーである吉村雄治氏（轟組・陽和産業社長・高知県教育委員長）であった。それからの私は、内原野の窯場で土のこと、薪のこと、窯のこと、つくりのことと多くのものを教えられ、土佐の人々は幼い私をやさしく悟し、焼きあがった稚拙なものを買い育ててくれたのである。天気の良い日などに、縁側に寝ころんでみると、頭のてっぺんがぬげだして音もなくぐんぐんと舞い上がり、弁天池を見下ろし、それが安芸の町になり四国になり雲を抜け、やがて果てしない空間に浮かんだ美し

い地球を見ている、そんな自分を感じることもある。人間の存在のなんと小さなことよ。もし天才というものがあんならば、それに恵まれた人間を羨ましいと思う。凡人の私達がなにか作ってやろうと意気込んだとて知れたものなのである。やきものつくりは趣味と実益を兼ねていいですね、などとよく言われるのだが、確かに、人との関わりはドラマチックであり興味つきないものがある。しかし、それだけに作るとき、焼くときのお膳立てがなかなか厄介で、あちらを立てればこちらが立たず、いっこうにまとまらない。それ

に、小さくまとまってもつまらないのである。

古いやきものや絵画・彫刻を見ると、音楽を聞くと、本を読むときに心のふるえを感じるがある。私の振幅と、時が生んだ賜物の振幅が、かすかに、ときに強く共振するのであるうか、背中がぞいぞいして胸キュンになるのである。これが欲しい。

年月が過ぎ、窯場は次の世代を要求している。そして、また次の世代へと繰り返されることであろう。ものを創るということは、長い長い時間の積み重ねのなかから、ときおりピ



カリと光るものが生まれることではないかと思うのである。仕事場の横に青木の巨樹がそびえ、この頃はいく種類もの野鳥がひっきりなしに訪れ、騒がしく赤い実をついばんでいる。近くのピラカンサはもうまる坊主で、鳥にもうまいまじいがあるのだろうかと思ったりする。南天にもとまっているので、青木の実も間もなく食べつくされるだろう。鳥がバサバサと飛びたち、キーンツとかん高く鳴く。場が、人を育て、ものを創りだす、そんなことを思う今日この頃である。（陶芸家・高知大学講師）

日曜日のNHK大河ドラマ『翔ぶが如く』を涙なしでは見られないと語ってみせる友人がいる。数年前に鹿児島県庁に出身していた彼にとつて、茶の間に届く薩摩弁は、今やその心根を激しく揺り動かす力を持っていると言ったのだ。この点では私も負けてはいない。それは、このドラマに先に登場したジョン万次郎が語る台詞に、あの鮮烈な土佐訛に、シーンときたことで明瞭である。

ナレーターにまで薩摩出身者を充て、おまけに字幕で方言に解説を加えるといった手の入れようには、NHKの並々ならぬ意気込みを感じる。

西郷隆盛という歴史的英雄を一地方だ

## 訛とアイデンティティー

渡辺 一雄

けの人物としてのみ捉えていては、これを以て国民が共有するヒーローにまでドラマ化することは困難かも知れない。しかも、日本人が大切にしている郷土意識（愛）をその腹のうちに宿していない人物では、その共感を得るのが難しいともいえる。強烈な土着性が鮮やかに蘇るのは、訛や方言を耳にした時であることを考え併せると、一地方の人物でありながら、日本人の持つ心的傾向に鋭敏に反応しつつ展開されるこのドラマの成功の秘訣は、正にこの訛と方言の矢継ぎ早のオンパレードにあると言えるだろう。

郷土の持つ精神文化の礎としての価値は、郷土を離れて後に却って鮮明に意識

される故郷への帰属感を脈々として育てているところにあるだろう。しかし、地域社会が単なる居住空間としてのアメニティのみが強調される傾向にある今日の状況を考えると、こうした基盤がいつまでも強固であって欲しいとの願いに対して、一抹の不安を禁じ得ない。地方の時代、地方文化の掘り起こし、創造が叫ばれて久しい。改めてその言葉が現実味を帯びるためには、これを支える故郷アイデンティティをしっかりと持った「人」のエネルギーの充電を期待して止まない。

（文部省 中学校 課）  
（前高知県文化振興課長）



# ヴィーダーゼーエン

## 1 デトモルト音楽大学

中島 亨

八八年九月から翌年七月まで十ヶ月間、文部省在外研究員としてドイツ・デトモルト音楽大学に留学してまいりました。

フランクフルト国際空港でローカル線に乗りかえ、Y S機の三分の一位の大きさだったでしょうか、パイロットが手動でタラップを上げ下げしたり、操縦席が丸見えの小型機で、ドイツの秋の田園風景や点在する森を眼下に見下しながら、残してきた家族のことや、初めての外国生活の行く先を案じつつ、デトモルトに最も近い空港、パターボーンに向かったのがつい先日のような気がします。さて、デトモルトといっても小さな町です。知っている方は少ないでしょう。ドルトムントとよく間違えられますが、そのドルトムントの北東約二〇〇km、ハノーファーの南西約一〇〇kmあたりに位置し、人口約六万、野うさぎが跳びはねたり、

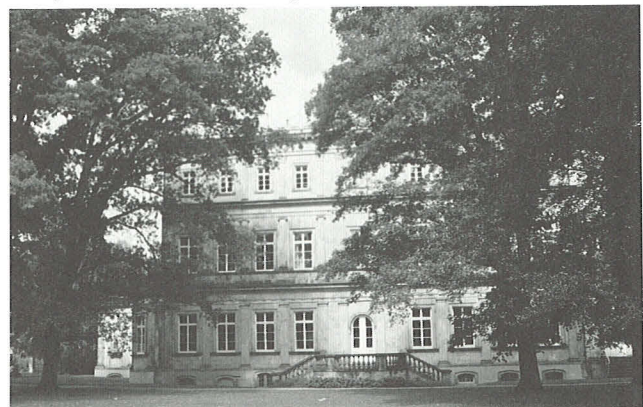
リスがちよこまかとかけっこしたりする美しい静かな町です。

「デトモルトは田舎だから」と経験者にきいていたのですが、どうしてどうして、教会、お城、市庁舎、市がたつ広場、全国チェーンのデパートやスーパーなど、都会にあるものはひととおりあり、なんと公立の劇場まであって、予想以上の大きさにびっくりしました。劇場があるという事は、専属のオーケストラ、合唱団、舞踊団、劇団、舞台・照明係のほか、多くの裏方さんがかかえているということですが、この位の規模の小都市にこうした文化がもてるというのはさすがドイツですね。国力を感じます。

大学は街の中心から歩いて五分位のところにあり、公園といった方がふさわしい起伏にとんだ緑豊かな広いキャンパスの一角に、昔は王侯の夏の別荘だったという歴史と伝統を

感じさせる石造りの本館と、それとは対照的に、プロの音楽会や卒業演奏などが毎晩のように行われるモダンなホールが実にバランスよく並んでいます。土曜日の午後など、散歩や読書を楽しんでいる一般市民の姿をよく見かけました。いかにもドイツ的な風景です。かつてはブラームスも教鞭をとっていたこともあり、彼が使用していた部屋には、私の留学中、「ブラームスザール」という室名がつけられました。大学の規模は西ドイツで二番目に大きく、その歴史も二番目に古いのだそうです。

レッスンは日本の音大と同じく一対一で、一人の学生に対して一時間半たつぷりで行われます。毎週受講する学生、ときどき顔を見せる学生、オーケストラのオーディションがある前にもみ来る学生、と様々です。で、時間割りは一定でなく、毎週変



大学本館

わります。中味については専門的になりませんので省略しますが、演奏のあと必ず先生と学生が議論し、音楽を論理的に深めていくという授業のすすめ方が強く印象に残っています。議論中、先生はイスに座り、学生はテーブルに腰かけて、という場面をよく見かけましたが、当初はマナーの違いにずい分とまどったものでした。

卒業はわが国のように四年を原則としておらず、早くも二年半、指導教官の許可さえあれば四年以上在学できるシステムになっています。例

えば、クラリネット学生の場合、はいれるオーケストラに入団することがさしあたっての目標ですので、職につけるまでレッスンを受けてつづけることが可能です。

で、オーケストラの席が得られると即卒業かといえますと、必ずしもそうとはばかりではなく、ご存知のと

おり、ドイツのオーケストラにはランク(S・放送・A・B・C・D)の順にランクづけられている)があり、常に上のランクのポストを窺っていますから、いつまでも大学に籍を置いて、オーケストラの求人情報と、くめどもつきない音楽をもっている先生のところに通う学生も沢山います。私の教室にはAオーケストラに所属している六年以上在籍の学生が三人いました。但し、最近の国の方針で外人枠がせばめられたことや、新陳代謝をよくするため、二年半で卒業を促す教室もでてきているようです。

卒業試験はききしにまざる実なきびしいものでした。夜、まづ公開のステージで四〇〜五〇分演奏し、翌日の午前中、やはり公開で、こんどは別のレパートリーやさまざまな課題にとり組むという内容になっています。質もさることながら、一人の学生に要する時間も我が国の試験とは比較にならず、従って、年度末一斉に行うことは物理的に不可能で、毎週、それも週に数回実施しなければ全てを消化することができません。先生も学生も大変だなあと思いました。評価は5段階で1が最も良い成績です。

火木土の午前中に立つ市

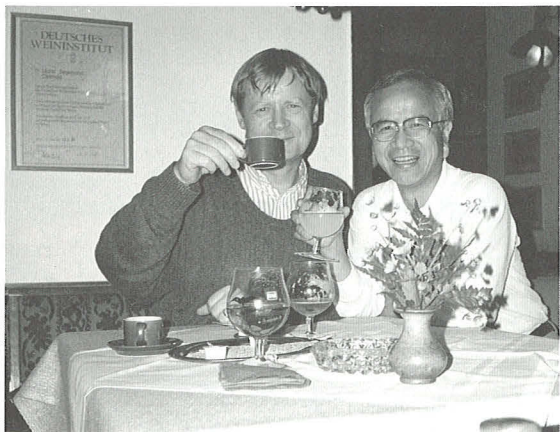


火木土の午前中に立つ市

コンチエルトイグザメメントという試験もあります。これは卒業試験で1をとった学生全てのなかからさらに選抜して行われるもので、演奏家になるための登竜門だといわれています。オーケストラと協演したあと、ソ

口の演奏会をもち、その翌日、卒業試験のときよりもっと高度な課題をこなさなければならぬ、といった気の遠くなるような試験ですが、才能はもとよりあらゆる力が備わっていないければ、この切符を手にするのはむづかしいようです。

ところで、私が師事した先生の名前はD・ハンス・クラウス。五年前に、ケルン放送管弦楽団の首席奏者を退き、母校の教授になられた方です。先生のクラリネットは、音色、テクニク、音楽ともに素晴らしい、そのうえ、レパートリーの広さは驚くほどです。また、耳、記憶力が並外れていて、学生達はレッスンのときいつもふるえあがっています。なお、この音大のプロフェッサーになるには、教授や学生の前で、演奏とレッスンをを行う試験を受けなければならぬということです。わが国の採用方法と異なり、大変シビアですけれども、その方が公平かもしれませんね。



クラウス教授と筆者

先生の先生はJ・ミヒャエルズという方です。世界的に有名なクラリネット奏者ですが、デトモルト音大退官後はなんとピアノリストとして活躍しておられます。また、作曲家、編曲者としても知られており、現代、学生が室内楽でレッスンを受ける時、弦楽器を自分で弾いて指導されたということですし、この音大の学生オーケストラは、先生が指揮をされた頃が全盛だったようです。ドイツにはこういうマルチ人間がいっぱいいるのであります。

(高知大学教育学部教授)  
(注)ヴィーダーゼーエンは「また、お会いしましょう」という日常語。

## 市制一〇〇周年

# 三つの文化イベントの意義

細木秀雄

舞台一面の白い紗幕に「土佐風流」という題字が映し出され、「南国高知は明るく暖かき国にして……」という新作長唄の声が流れ出す。置き唄が終わると、それまで暗かった紗幕の奥がほかに明るくなり、そこにいた四十人を越える踊り手の扇が、上手から下手へかけて次々とリズムカルに上がって、波のうねりを表現する。そのとき観客席から一様に洩れた嘆声のざわめきが印象的だった。観客席の人々は一体となった。市民がこういう一体感で結ばれることはめったにないだろう。芸能文化の創造活動があればこそである。

舞台では紗幕が上がり、曲も踊りもとどまることなく進んで、土佐の名所、名物や、歴史と人物が変転自在に舞台を彩り、立ち現れては消えてゆく一瞬一瞬の情趣を追ううちに、高知城をめぐる白鷺の舞の輪が広がってゆくイメージが高揚して幕がおりた。舞台芸能は幕が明いた以上、

時間とともに進んで終わらなねばならないが、「土佐風流」は終わるのが惜しいと思わせるものがあった。



普通の舞踊会が出る古典曲は大半が、二十分前後の物だが、正直言って長いと感じることが多い。見るのに、相当、忍耐を強いられることを覚悟しなければならぬ。(無論、上手が踊ればそんなことはないが、上手な踊りを見ることは稀である) 「土佐風流」はほとんど三十分くらいあるが、あれよあれよという間に、早、済んでしまったという感じであった。三十分が短く感じられるというのは、日本舞踊の鑑賞体験としては珍しいといっている。その原因はというと、題材が土佐物であることとともに、当代一流の人に頼んで出来た曲も振りつけも、よかったからである。特に国際的な仕事もしている花柳芳次郎氏の振り付けは、この作品を新しい感覚の日本舞踊に仕上げている。

加えるに花柳芳次郎氏の直接指導を受けて、高知県日本舞踊協会の各流派の人々が、その力を結集して見事なアンサンブルを示したのである。「土佐風流」は高知市文化祭のオープニング行事として企画・制作されたものである。その際、市制百周年記念事業として文化祭当局から特別な助成金が出ているが、それは恐らく総制作費の五分の一に、とても達してはいないであろう。高知県日本舞踊協会の人々の献身的な苦勞が推察できるのである。しかしまた特別助成金が「土佐風流」実現の引き金になったことも考えられる。

「土佐風流」の出演者約五十人が、すべて各流の名取りで、いわばプロまたはセミプロの踊り手だったので反して、「ミュージカル・RYOMA」は、百人を越える全出演者が若いアマチュアばかりだったにもかかわらず、強烈な感動的舞台を生んだ。しかも脚本づくりから上演まで、ほとんどすべて地元で、手づくりで仕上げたミュージカルであった。

この舞台の完成までには、高知の演劇、舞踊、音楽、美術、文学、学芸にわたる各界の活動家たちの熱心な協力があった。出演者はまったくゼロからのスタートであった。公募に応じたさまざまな若い市民や学生などが、ミュージカル・スクールの

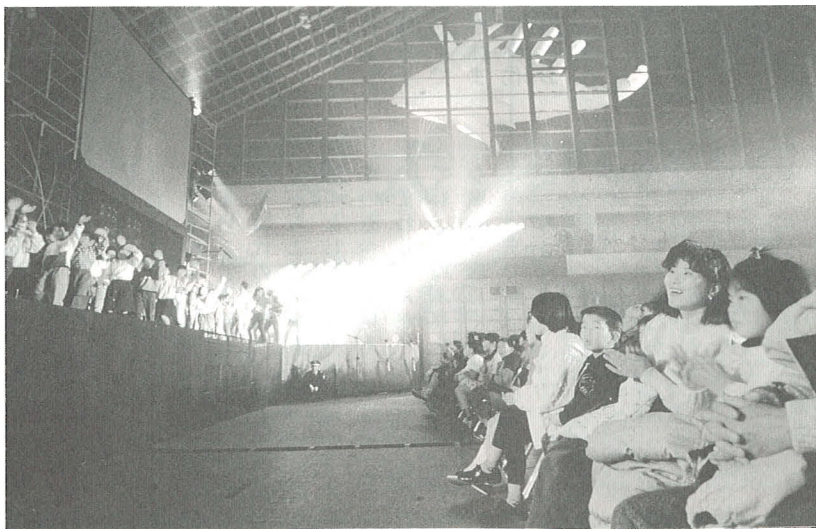
受講生となり、基礎レッスンから始めて、自主トレ、強化合宿や抜き稽古、総稽古などの難行苦行を耐えぬいて、しかも本番では能力の限界まで燃焼しきったような表現を見せた。技術を超える熱情的表現が人々を打った。

「ミュージカル・RYOMA」に燃えた若者たちの文化的エネルギーの発現は、わたしたちに事態の再認識を迫る驚きであったと同時に、若者たちが無意識的に求めていたものは、こういう文化的エネルギーの発現の機会と場ではなかったかという思いがする。人生の新しい価値づけという意味を持つ若者文化の発現の機会と場をつくり出すことが、行政を含めてわたしたち地域の人間に課せられた役割だと思ふ。

「ミュージカル・RYOMA」は高知市文化振興事業団が市制百周年事業として主催することによって何とか実現したが、大変な資金不足に悩まされたことは想像に難くない。

「ウランド伝説」は高知・まちと人の一〇〇年一〇一人委員会が主催するメインイベントで、有力な協賛各社も付いていたので、制作資金の面ではたぶん恵まれていたのではないかと考えられる。昨夏、浦戸湾岸で上演されるはずだったが、

台風のため中止となり、年が明けて高知ではさんセンターでの屋内上演となったため、構想の完全な達成には至らなかったようだが、それでも七色のレーザー光線や花火、二面の大型映像、音響装置などハイテク技術を十分に使って、光と音と劇と映像を組み合わせた激しいそして新奇なパフォーマンスの世界を現出した。内容は、空を飛ぶ巨大魚によって象徴される浦戸湾の危機と、そのよみがえりを訴えかけるのが主題である。土佐の民話と芸能を取り入れた現代的な伝説劇の脚本と総合演出は松本俊夫・京都芸術短大教授。出演者はオーディションで選ばれた主役グループの小・中学生のほか、多数の市民や学生、地元劇団、バレエ団体、郷土芸能保存会の人々や、小学生の合唱団など、総勢二百三十人を越える混成の集団が心を一つにして感銘を盛り上げた。以上三つの文化イベントは高知市制百周年の精神的モニュメントになった。しかしこういう文化活動はその年だけでいいというものではない。本来、文化は持続的で、安定的な継



続性を持つものでなければならぬ。われわれが郷土を愛し、郷土を誇りとする拠りどころは、独自の文化にほかならない。今や企業の文化化という言葉さえ声高に言われている時代である。文化は価値であり、また価値を生む。行政の文化に対するより一層のバックアップを切望する。

(映画・演劇評論家)



## 千頭 泰

# 歌壇評余滴

亡くなった宮柁二先生は生前たくさん新聞、雑誌の選歌欄を受け持っておられた。中でも「朝日歌壇」の選歌には心血をそそがれ、もう出版社選歌のできなかった晩年にも、病床にからだを横たえながら、ダンボール箱で運ばれてきた投稿ハガキを見、評文は奥さんの英子夫人に口述するのが常であった。

私が最後にお目にかかったのは、拙著『海彦』上梓のお礼をかねての昭和六十年の夏のことであった。最早、おっしゃることは充分には理解できぬほど脳血栓による言語障害が進んでいられ、奥さんのほか誰方も通訳できぬということであった。先生は杖にすがるか、奥さんを支えにするかで、歩行もままならぬ状態であった。お庭には白いサルスベリの花が咲いていた。

その先生がまだお元気なころ、新聞歌壇について次のような見解を示されている。

新聞歌壇の選評は、作者に向けての批評の部分と、一般読者に向けた鑑賞の部分によって成り立っている。歌はハッとさせられるような、心の洗われるものにも出会うことがある。ところがこうした作者たちが急速に伸びるかという、そうでもない。

その理由を考えてみると、一つ

には選者が作者に向けて書いている評の部分を通りして、鑑賞の部分に心奪われるためではないか。その所を注意しないと作者の向上にはならない。

私が「高正文芸」の歌壇を担当しだしてもう九年目に入った。いつも先生の言葉を座右において、逸脱しないように自己規制しているのであるが、一首に二百字という評文の量は、他の新聞では例の少ない長さである。私は恵まれた分量の中に、更に自分のエッセイの部分の割り込ませてみることにした。新聞という使命を考えて、短歌に関わらぬ人々にも読者として親しみを加えることが、歌の底辺を拓げるのに役立つのではないかと考えたためである。

老人がバスより出でて用足すをのどけく待てり乗合いの客

62・3・25 森尾はる子

昭和十七年、私は高等学校三年であった。たまたま英語の先生が休まれ、臨時に教頭の信清誠一先生が代行された。後年県美術家集団のお仕事で卓抜した伎倆を示される先生であるが、英語も実に堪能であった。授業中一人の生徒が便所に行ってもよいかどうか、許可を求めた。耐えることができぬのを確かめ、生徒は中断を許されたが、先生は「英語でどういふか知っているか？」われわ

れに尋ねられた。「ネーチュア：」（後出評文）はその時の産物である。英語は当時敵性語で、われわれ皆が嫌いぬいていた。私もその点では、人後に落ちなかった。しかしその時のたくまざるユーモア、懇切を極めた文脈の説明、いつもと違って英語がこんなにおもしろいものであるとは思ってもみなかった一時間であった。その時の事を思い出して書いたのが、次の評文である。

「評」「用を足す」ことを英語では「ネーチュア コールズ ミー」と言うようだ。直訳すれば「自然が私を呼んでいる」で、西洋人はうまいことを言うものだ。そんな中学時代の恩師の言葉を思い出しながらこの歌を選んだ。郊外のちよっとした停留所であろう。スキの原っぱが見え、土手が見え。おまわりさんがバイクで来かっても、見ぬふりをする、もうそんな風景も珍しくなった。

この一文で私は大きなミスをおかすところであった。「ゴールド・ミ」と書いて原稿を送ってしまったのである。当然学芸部長さんが黙って訂正してくれたからよかったものの、紙面で気が付き赤くなった。やはりいまだに英語ズッコケ人間であることは変わらない。

(歌人・「珊瑚礁」主宰)

## 私の風景

### ロバーツ・ルーク



## 大川筋武家屋敷の長屋門

私は何度この大川筋にある屋敷の前に自転車を止めて見入ったかしのれない。長屋門、母屋、庭を仕切る塀がそろっており、江戸時代の武士の生活を容易に想像させる力を持っている。これほど揃った武家屋敷は全国的にも珍しい。

卒業式の時節になった。早いところではもう終わっているが、これからが本番の季節である。もろもろの感慨を胸に秘めて、学窓を育っていく若人の未来に、無限の希望がひろがっていくことを祈りたい。

小学校や中学校の卒業式に、父兄が出席するのは当然としても、このころは大学の入学式や卒業式にも、親がついてくるのが当たり前になってきているという。それにしても、「卒業生よりも親の教が多いではないか」とたくさん親の出席者に驚いて聞くと、学生の方はさも当然といった顔で、「馬鹿だな、親は一人の学生に二人いるじゃないか」と答えたという。なるほど、言われてみれば、親は二人いる。啞然とする方がおかしいかもしれない。

それにしても、こつした現象を喜ぶべきか悲しむべきか。この詮索はしばらくおくとして、三無主義という言葉が流行語になったのは、昭和四十五年である。当時の高校生が「無気力」「無関心」「無感動」と言われたこと

### 現代風俗を考える〈6〉



## 卒業式

から、この言葉が流行した。それから二十年たった今日、平成元年版の「青少年白書」を見ると、時代がそのままタイムスリップしたように、今の若者は「無気力」「無感動」「幼児性」「自己中心性」であるといっている。さてこの二十年間、若者は「無気力」のままだったのだろうか。

ところで卒業の「卒」の字は、「終る、尽きる、止まる」の意味だが、アメリカでいう卒業式の「コンメンスト」は「新たな始まり」という意味の言葉である。日本とアメリカのもの、その考え方のちがいをみるような気がするが、考えてみると「卒業」はそれで業を終えるのではなく、そこからが本当の「始まり」である。そう考える方が納得がいく。

人間の歴史の中には、子どもが育ちにくい時代が、幾度かあったように思う。戦乱の時代や飢饉に迫られた時代はもちろんだが、平和であっても、そう思われる時期がある。不幸なことだが、現在の日本も、まさにそんな時代であるように思われる。

自由に伸び伸びと

北村 泰章

昭和54年7月、個性の尊重と作品の質的向上及び理論の高揚を目的に「川柳木馬」は産声を上げた。毎号の会員（同人）による自選作品10句と、全国の著名な柳人の作品や柳論を掲載しているが、着実な歩みを見せ、季刊ながらも昨秋10周年記念号を発刊するに至った。特に「昭和二桁生まれの作家群像」は第18回目を数え、それら作家の重厚な作品と作品論及び作家論は好評である。川柳木馬創立10周年記念号では、会員の創作25句と全国誌上川柳大会作品や、「六次川柳作家以降川柳はどのように変わってきたか。また、これからの川柳はどうあるべきか。」などの論集が収められ、充実した内容と斬新な企画が注目を浴びている。

〔全国誌上川柳大会入賞作品〕  
最優秀作・福光二郎（京都）  
美しく減んでほしい木の駅舎  
優秀作・坂東弘子（香川）  
眠りつづける母のまなこにあるか 野火  
優秀作・田村精子（高知）  
明るいい色でぬって私がいなくなる  
〔会員作品〕 西川 富恵  
野は緋いろ少年四肢をかがやかせ  
土居富美子  
八月のトマト昔の味がする  
なお、この10年間の歩みの中で古谷恭一が第4回火の木賞及び第3回川柳Z賞

魚の棚ニュース

小さな町のミニコミ紙

澤本 一水

高知市の魚の棚、ご存知ですか。はりまや町中種商店街東寄り、北へ入った小さな路地が、それです。この町は、寛文年間（一六六一〜一六七三）に開設され、藩の統制品であった水産物を売買していました。当時、高知市内に三カ所ありましたが、現在はここだけになりました。



ニューズを出すきっかけとなったのは町の記録を残そうという声があったことからです。そして、市民市民のみなさんにも、この町の存在を知ってもらえることを願って、作り始めました。

全長百メートル足らずの町で、二カ月に一度の発行に不安はありましたが、昭和六十年十月に、沿革略史を中心とした第一号を発行しました。その後、数多くのマスコミにとりあげられ、脚光を浴びました。テレビでは、テレビ高知の「おらんく風土記」をはじめ、NHK、テレビ朝日、RKCテレビで。新聞は、高知新聞、朝日新聞、日本経済新聞、流通新聞で。ラジオではRKC「ようすけのとびだせ土曜日」「いきいきワイド」、NHK「ネッ

高知県吹奏楽連盟

健全な吹奏楽の育成を

中島 亨

高知県の吹奏楽の歴史は古く、明治36年頃、高知商業学校のブラスバンドの誕生がその第一歩とされています。その後、高知商業学校と土佐山田町学校バンドが中心となって活動が展開されるようになりますが、全国的な連盟結成の気運の高まりのなかで、高知県吹奏楽連盟も、昭和30年11月に松本寛郎先生を初代理事長として正式に発足しました。

当初は15団体でスタートした連盟でしたが、現在は62団体約二千名を擁するまでに発展しております。組織の拡大は、当然のことながら演奏力の向上につながり、昭和30年代の高知商業高等学校の活躍はご承知のとおりですが、近年になって、吹奏楽コンクールでは四国大会で優勝したり、四国代表として全国大会へ出場する学校・団体も増え、また、アンサンブルコンテストにおいても全国大会で金賞を獲得するチームも出現するほど、そのレベルは着実に上がってきています。現在、高知県吹奏楽連盟では、この吹奏楽コンクール、アンサンブルコンテストのほかに、吹奏



浜田悦子バレエ研究所

バレエの輪の広がりを

浜田 悦子

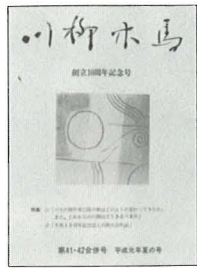
ソ連、フランスに学び感じたのは、バレエが伝統文化の中心で、体形の秀れた者を厳選し、長い学校生活の中で、基礎訓練を徹底して行っていることでした。高知出身で、小牧バレエ団のプリマとして華々しく活躍された広瀬佐紀子先生は、プロポーションのすばらしい外国のダンサーを見て、日本人のために「バレエを美しく踊る身体に矯正するレッスン」を体系化しました。

私は、昭和47年に教室を開設した後、先生の教えを受け、筋肉を伸ばし、身体の「ゆがみ」を矯正して、正しい姿勢がとれるように指導していくと、生徒達が美しく健康になり、表情が生き生きしてくることに気づきました。同様に美容体操のお母さん方にも著しい効果が表れています。日本のバレエ界は、何回まわるとかテクニクを競い、基本となる身体をつくる過程を怠る傾向にあります。バレエが芸術であるゆえんは、肢体による「踊る心」の表現にあります。

その芸術性を高めるためにも、私達は、ドラマチックな展開のある全幕物を極力上演し、バレエ本来の良さを知っていただき



を、海地大破が第5回川柳Z賞を受賞。恭一句集『枕木』、大破句集『満月の猫』を発刊。恭一は読売新聞高知歌壇の、北村泰章は高知県芸術祭川柳の部の選者として活躍している。



トワーク四国」で。また落語行脚をした林家とんでん平さんの本や、タウン誌月刊「土佐」等々です。この町は、昔ながらの狭い道幅ですから、向かいの店も見え、忙しい時は手伝い合うし、子供達は、隣近所も我が家のようにして育ってききました。そんな下町情緒のある町を、いつまでも残してゆきたいと、そんな願いが魚の棚ニュースに込められています。連絡先 高知市はりまや町一六〇一〇 電話 八二二二五四〇（澤本）

楽祭や一昨年度から始まったマートイングフェスティバルなど多くの行事と取り組んでおりますが、私達は、このようにせっかく育ってきた吹奏楽をさらに発展充実させるために、そして健全な方向へ導くべく、常にその意義や目的を明確にしなが普及、育成にあたらねばと思っています。〔高知県吹奏楽連盟理事長〕 連絡先 土佐山田町旭町四一三二二八 電話 〇八八七五二二四二二九（吉田 弘章）

たいと願っております。外国のように、音楽やバレエが大眾に愛され、日常生活の近くにあるような、文化の豊かな国であり、県になって欲しいと思います。昨年九月、城西公園で初めて催した、「野外バレエの夕べ」はお一人でも多くの方にバレエに親しんでいただきたいとの想いを持ち続け、それが実現した企画でした。連絡先 高知市福井町九一三 電話 二二一七〇八八



潮江天満宮から唐人町にかかる天神大橋は、鏡川に架けられた最初の唯一の橋としてよく知られている。鏡川の南岸、東側のたもとに建てられた「橋のしるべ」。大正14年（1925）架橋時の親柱と橋畔にあった紋（復元）が橋の歴史を感じさせる。後方の欄干のきれいな赤とのコントラストも味わい深い。

風伯

「時間のいと」

手紙が届いた。神戸の異人館の画家として知られる小松益喜画伯からだ。その要点を記す。この頃は昼は異人館、夜は阪急電車の梅田、三宮間の定期券で、毎夜九時から十一時まで、電車の中で肖像画を勉強中です。目下

はつきり言って、私は素寒貧のなまけものである。浪費しようにもカネに縁なく、そのかわり時間を浪費して、日々、ぐうたら生活の連鎖のもとで、かほそく息をしている。今日も寒気が酷いから、炬燵にもぐりこんで、雑本を枕にうたた寝していたら、長文の

千二百枚、メモ帖がたまりました。一万枚になったら色付けをして、引き伸ばしたり、縮小したりして、『車中千面相展』を開く計画です。一夜で二十枚として五百日ごとと二年かかります。御意見をおきかせ下さい。

小松画伯は、今年八十六歳になられるが、人生は繰り返しのきかない一回性——という認識のもとに、「時間」を最大限に生かして、新機軸の人物画を手がけておられる。そのひたむきな作画態度と意欲的な生意識には、いくらなまけもの私でも、骨身にこたえる。

あア、歳月は人を待たず、時人を待たずとか。はしなくも小松画伯の手紙は、ルナールの「時間を無駄にしないのが、時間だけ」の警句を思いださせてくれた。（鯨）



スイス・日本音楽交流―木管アンサンブル―

# グラツィオオーソ六重奏団

●平成2年4月7日(土) (pm.6:00開場、pm.6:30開演)

●県民文化ホール(グリーン) 入場料/2,000円(全席自由)

主催/高知市文化振興事業団・グラツィオオーソ実行委員会

ヨーロッパを中心に活躍しているスイスの演奏家三人を招き、音楽を通じてスイスと日本の交流を図ろうと企画された演奏会です。県内では少人数編成の木管アンサンブルは、あまり聴く機会がないようですが、この六重奏団の優美な(グラツィオオーソ)音を、是非この機会にお楽しみ下さい。

※チケットは市内主要プレイガイドで発売中です。



F.J.ハイドン…木管五重奏曲「ディヴェルティメント」

W.A.モーツァルト…ピアノ五重奏曲 K.452

J.イベール…木管五重奏曲「3つの小品」

F.プーランク…ピアノと木管楽器のための六重奏曲

フルート/横本吉雄

オーボエ/八木菊子

クラリネット/ヨルク カピローネ

ファゴット/エドウィン エリスマン

ホルン/岩佐 修

ピアノ/山崎晶子

■最新刊■

## わがまち百景

随想と写真でつづった高知市100の風景へのメッセージ。散歩やハイキングのガイドブックとしても最適。

- \* A 5変形判・220頁
- \* (財) 高知市文化振興事業団 編
- \* 定価 1,200円

— 3月中旬発売 —



「わがまち百景」掲載写真より

## 出版のご案内

### 土佐自由民権資料集

外崎光広編

定価三〇九〇円

土佐自由民権の基本的資料を事件別に分類・収録し、原資料により各々の事件の実態が把握できるように編集した資料集。原典により民権を知ることができる。

・高知レポート4

### 土佐の自由民権運動

外崎光広著

定価一〇三〇円

従来の自由民権研究に一石を投じる画期的な著作。土佐人必読の一冊。

付方言土佐日記全訳注

### 土佐日記

土居重俊著

定価一八〇〇円

市制一〇〇周年記念出版

### 図録高知市史

高知市文化振興事業団編集

定価二五〇〇円

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町五丁目二番三号

TEL(〇八八八)⑦四三三五

郵便振替 徳島8-14869